

エレガントなガーデンシティ、メルボルン
第20回 国際視野画像学会に参加して

視野学の基礎的な演題まで含め バラエティーに富む内容に



このたび、『第20回国際視野画像学会』(International Visual Field and Imaging Symposium: IVFIS)が1月23日から25日までの3日間にわたり、オーストラリアのメルボルンで開催された。

セッション合間のコーヒーブレーク

本学会は1974年にフランス・マルセイユで『国際視野学会』(International Perimetric Society: IPS)として第1回が開催され、以後2年ごとに、神経眼科や緑内障と視野との関連研究を行なっている大学機関が中心となり、世界各地で開催されている。わが国では、1978年に第3回を東京医科大学の松尾治亘教授が東京で、1992年に第10回を岐阜大学の北澤克明教授が京都で、そして2008年には第18回を近畿

大学の松本長太准教授(当時)が奈良マルセイユで『国際視野学会』(International Perimetric Society: IPS)として第1回が開催され、以後2年ごとに、神経眼科や緑内障と視野との関連研究を行なっている大学機関が中心となり、世界各地で開催されている。わが国では、1978年に

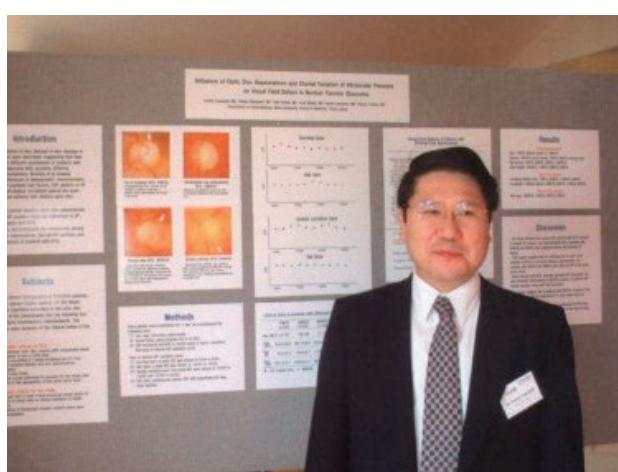
はじめに

大学の松本長太准教授(当時)が奈良で開催している。

近年、HRTやOCTなど眼底画像解析装置が普及し、視機能と眼底の形態変化との関係に関する研究発表が盛んになつたことから、前回、2010年のスペイン領カナリア諸島のテネリフェ島で開催された第19回から『国際視野画像学会』と名称が変更された。

IVFISの特徴

本学会の特徴は、緑内障や神経眼科の臨床を専門とするMDと視覚



日本大学
准教授 山崎 芳夫
(日本大学医学部視覚科学系眼科学分野)

学や画像工学を専門とするPh.D.が、視野と眼底画像解析について1つの会場でじっくりと議論を重ねることにある。ちなみに現在、本学会の理事長はハンフリー視野計のプログラマー・ソフト開発で有名な米国・アイオワ大学のChris Johnson博士である。本学会での発表と質疑応答は他に国際学会と同様に、すべて英語が原則である。しかし、視野学の発展や視野計の開発に携わった先人たちは欧洲出身が多く（ゴールドマン視野計のGoldmann教授とオクトパス視野計のFankhauser教授はスイス、ハンフリー視野計のHeiji教授はスウェーデン）、故に学会参加者の多くは英語がSecond Languageであるため、たじたじしい英語にも極めて寛容である。前回の本学会を主催されたスペインのGonzalez-Hernandez教授は、講演は自身が英語で行なうものの、質疑応答は英語に堪能な教授令嬢が通訳するといったことが恒例になっている。

本学会の第2の特徴は、セッションが終わるたびに30分のブレークタイムがあり、コ

ーヒーを飲みながら質疑応答の延長ができることがある。そして第3の特徴は、後に紹介する学会中日の午後のピクニックと最終日の恒例のバケットにより、参加者相互の親睦が図られることがある。

第20回—IVFIS

今回はメルボルン大学の眼科学と視覚科学の合同チームがホストとなり、赤道を越えて初めて南半球で開催された。折しも、メルボルン市内でテニスの全豪オープンが開催されている時期と重なり、ダウンタウンの中心には巨大なパブリックビューイングが設置され、市街は毎日、深

夜まで大変な活気を見せていた。メルボルンはオーストラリア大陸の南東部にあり、大陸の最南端に位置するビクトリア州の州都で、人口400万人の都市である。1850年代のゴールドラッシュ以降に急速に発展し、1956年には南半球では初の夏季オリンピックも開催されている。

メルボルン大学は1853年に設立された市内中央に位置する州立総合大学で、タイムズ誌の世界大学ランクインでは2005年に19位にランク付けされたこともある。広大なキャンパスの中に11学部と13のカレッジ（学生寮）を有している。今回のIVFISは、カレッジの中で最古（1872年設立）のTrinity Collegeの講堂で開催された。

学会は「黄斑部の機能と形態」のセッションから幕が切って落とされた。3日間で一般講演は41題、学術展示は29題で、合わせて70題の演題が世界13か国からの参加者により発表された。日本からの参加者は、松本長太教授の近畿大学チーム、杉山和久教授の金沢大学チーム、鹿児島大学の山下高明先生ご一家、たじみ岩瀬眼科院長の岩瀬愛子先生、本学

会の第1回から参加している滋賀医科大学名誉教授の可児一孝先生ご一家ら、総勢16人が参加した。今回、私は「緑内障濾過手術前後の視野障害進行速度の変化」につ



メルボルン大学のTrinity College



メルボルン市街

いて発表したが、演題全体では、OCT、HRT、SLOなど眼底画像解析装置により捉えた網膜・視神経形態変化と視野変化との関連が最も多かった。しかし、視野計の検査視標サイズが検査結果の再現性に及ぼす影響など、視野学の基礎的な演題までバラエティーに富む内容であつた。

本学会のハイライトは“*The IPS Lecture*”である。今回の演者はカナダ・ダルハウジー大学のBalwantray Chauhan教授で、“*Modern imaging insights into the progression of glaucoma*”のタイトルで講演が行なわれた。同教授は25年前、私と同じくカナダ・バンクーバーのブリティッシュ

世界のトップリーダーとして活躍している。また、同教授は学生時代に来日し、半年間かけて日本全国をヒッチハイクしたエピソードを持つ親日家であり、留学時代にはたびたび私のアパートを訪れ、和食を食べた。同教授は25年前、私と同じくカナダ・バンクーバーのブリティッシュ

世界のトップリーダーとして活躍している。また、同教授は学生時代に来日し、半年間かけて日本全国をヒッチハイクしたエピソードを持つ親日家であり、留学時代にはたびたび私のアパートを訪れ、和食を食べた。同教授は25年前、私と同じくカナダ・バンクーバーのブリティッシュ

世界のトップリーダーとして活躍している。また、同教授は学生時代に来日し、半年間かけて日本全国をヒッチハイクしたエピソードを持つ親日家であり、留学時代にはたびたび私のアパートを訪れ、和食を食べた。同教授は25年前、私と同じくカナダ・バンクーバーのブリティッシュ



真剣な眼差しで学術展示に見入る
岩瀬愛子先生(第1回日本視野学会会長)と杉山和久先生

ア・クイーンズランド大学のJoanne Wood教授による“*Visual function and driving*”であった。わが国では、視野障害と患者QOLについては読字や書字が最大の問題であるのに対し、広大な国土を持つオーストラリアでは自動車運転が大きな課題であることが興味深かつた。

ア・クイーンズランド大学のJoanne Wood教授による“*Visual function and driving*”であった。わが国では、視野障害と患者QOLについては読字や書字が最大の問題であるのに対し、広大な国土を持つオーストラリアでは自動車運転が大きな課題であることが興味深かつた。

学会初日の夕方には、学会場からバスで約40km離れた郊外にあるEmu Bottom Homesteadという150年以前の開拓当時に建築された農場の母屋を改造したレストランに行き、オーストラリア先住民族のアボリジニ末裔による民族舞踊を鑑賞した後、オージ・ビーフに舌鼓を打つた。特に圧巻だったのは南半球から見る夜空に輝く星座群で、プラネタリウム

・ソーシャルプログラム

IVFISの目的は「視野と画像」

ユコロンビア大学で、緑内障の世界の大友であるDrance教授の下で緑内障フェローとして研究を一緒に行なった旧友である。英國・カーディフ大学で視覚科学のPh.D.を取得後、Drance教授の下で緑内障視野研究の基礎を学び、その後、ダルハウジー大学へ移り、現在、画像解析装置と視野解析を組み合わせた研究では

世界のトップリーダーとして活躍している。また、同教授は学生時代に来日し、半年間かけて日本全国をヒッチハイクしたエピソードを持つ親日家であり、留学時代にはたびたび私のアパートを訪れ、和食を食べた。同教授は25年前、私と同じくカナダ・バンクーバーのブリティッシュ



ウエルカム・レセプションでワインを楽しむ
(左より)杉山和久先生、可児一孝先生ご夫妻、岩瀬愛子先生、大久保真司先生(金沢大学)

つた。

2日目の午後には Hanging Rock

2日目の午後には Hanging Rock と Kyneeton Ridge Winery のバスツアーアーがあつた。Hanging Rock は、クトリア州中央の岩山の景勝地であるが、昔、この山を遠足で訪れた名門女学校の教師と生徒が神隠しにあつたとされる失踪事件を題材に取り上げた‘Picnic at Hanging Rock’と

についての徹底討論と同時に、学会参加者間の親睦を深めるために学会を主催するホスト側もソーシャルプログラムに力を入れていることである。

今回は、学会前日の夕方に、市内を流れるYarra 川に接する Royal Botanic

Gardens 内のガーデンハウスでのウエルカム・レセプションから始まった。長旅の疲れを見せず、世界各地から集まつた参加者たちは、美しい庭園でワインを楽しみながら、2年ぶりの再会に旧交を温め合つた。

2年ぶりの再会に旧交を温め合つた。

学会初日の夕方には、学会場からバスで約40km離れた郊外にあるEmu Bottom Homestead という150年以前の開拓当時に建築された農場の母屋を改造したレストランに行き、オーストラリア先住民族のアボリジニ末裔による民族舞踊を鑑賞した後、オージ・ビーフに舌鼓を打つた。特に圧巻だったのは南半球から見る夜空に輝く星座群で、プラネタリウム

いう映画の舞台である。

ビクトリア州は Macedon 産ワイ

ンの生産で有名であるが、Kyneton Ridge Winery は美味しいワインの味見をすることができた。

最終日の晩は、今回も I V F I S 恒例の伝統的なバンケットが、学会場である Trinity College から Ormond



Hanging Rock の岩山の頂上に立つ松本長太先生



Kyneton Ridge Winery での近畿大学チーム

College の講堂に場所を移して催された。Ormond College は 1881 年に設立され、メルボルン大学では 2 番目に古いカレッジである。

バンケットは毎回、参加者が国別に分かれて、それぞれが歌やプロ顔負けのパフォーマンスを深夜まで競い合って楽しむ I V F I S の名物行事である。今回の日本チームのパフォーマンスは「福笑い」で、近畿大

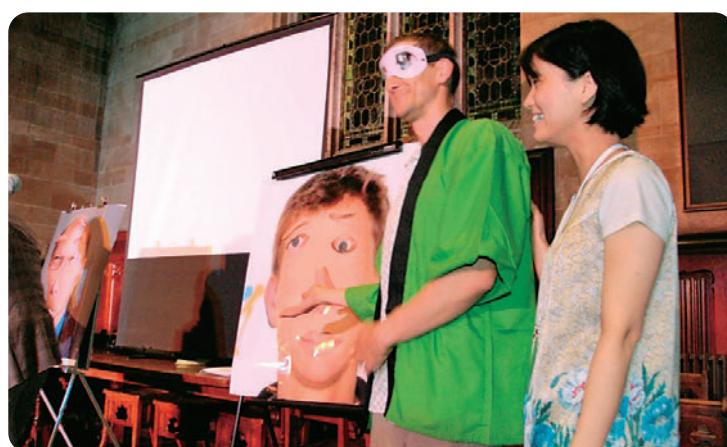
学チームが事前準備を行なった。学会理事長の Chris Johnson 博士や本学会のホストとして縦横無尽の活躍をされたメルボルン大学の Andrew Anderson 博士に目隠しをしておひい、日本の古くからの遊戯を楽しんでもらつた。会場は大喝采であった。その後、松本長太教授の指揮で「上を向いて歩こう」を全員で合唱した。

おわりに

次回の I V F I S は、2014 年 9 月にニューヨークで、ニューヨーク州立大学の Mitchell Dul博士をホストに開催される。ニューヨークといえば、ホテル料金も高く、学会出席に高額な出費が付き物であるが、この期間は大学も夏季休暇期間中であり、宿泊も大学施設を安価で利用できるので心配無用との挨拶があった。

ニューヨークは何回訪れても素晴らしい街である。ぜひ、日本から多くの先生方に参加してもらい、本学会が盛大になることを願つてやまない。

稿を終えるに当たり、記念写真を提供していただいた可児一孝名誉教授に御礼申し上げます。



日本チームの「福笑い」のパフォーマンス



Ormond College で催されたバンケット風景